

ベッドの周りにいる人はもう死にかけと思つて勝手なことを話している。だが、本人は話し声が聞こえている。でも、反応することができない。そんな状況におかれたら、だれしも絶望のどん底に陥るだろう。

逆に、医師から回復の見込みがないと言われながら、母親と看護婦の懸命の介護で奇跡的に反応や言葉を取り戻し、今ではわずかな言語障害を残すだけで歩行訓練を続けている。そんな例が、実際この世にあることを知った。

ある青年が、交通事故で一命はとりとめたもののまったく反応がなく、だ



新聞新日

反 応

93. 6. 3

れもがあきらめていた。母親だけは反応のない息子に向かつて、毎日明るく話しかけ、これに新人の看護婦が熱心に協力しているうち、半年たつて突然返事が出来るようになった。本人によると、周りの呼びかけはすべて分かっていたが、とにかく反応することができなかつたのだそうだ。

この話、実は京都・出町柳の名曲喫茶の雑記帳に記されていたもの。私の親類でも今、一家の大黒柱がくも膜下出血で倒れ、同じような状況になっているが、家族にはこんな例もあるのだから、と励ましている。雑記帳の筆者「H・K」さん、あしがとう。(忠)